【特集】今こそ逆襲のとき
～文学部のあり方とは～

平成 28 年 11 月 12 日(土)、文学部・文学研究科は、グランフロント大阪ナレッジキャピタルにて「Open Faculty 2016　文学部の逆襲 漂流する現代を生きのびるためのガクモン」を開催しました。そこで行われたシンポジウム「『文学部は役に立たない』のか？」について、増田先生と海老根先生にお話しを伺いました。

【シンポジウム当日の登壇者】
増田聡准教授　海老根剛准教授　小林哲夫氏（教育ジャーナリスト）　オバタカズユキ氏（ライター・編集者）
聞き手：今井達也、撮影者：高亜美
編集：阿部杏香

≪シンポジウムの集客≫

――僕もこのオープンファカルティに実際行ってたんですけど、集客すごかったですね。お客さんも、高校生から大学生、一般の方まで、どの方も興味持って聞いていてくれていたのかなと思います。

海老根：時期的にちょうど文学部不要論が世間を騒がせていたってことはあるね。

――この問題をシンポジウムで取り上げようといった経緯は？

増田：全体タイトルの「文学部の逆襲」もそうなんですけど、文学部の社会的な意義を社会に対して発信したい、という目的がまずあった。そこで「文学部は役に立たない」という主張に対する反論がやっぱり必要だろうということで決まったテーマですね。

――なんで成功したというか、なんでこんなにお客さんが来たんだろうとか、何か思うところありますか？

海老根：ひとつは、けっこう OB が集まってくれたんだよね。

増田：来てくれたね～。ほんとに。

海老根：あと文学部不要論の議論に憤っていた人は結構いたみたい。もちろん市大の OB もいたんだけど、それだけじゃなくて、他大学の文系学部を出た大人の人たちも来ていた。世間の「文学部は役に立たない」という声に対して、文学部はやられっぱなしだったでしょ。基本的にメディアの中でも完全に守勢に立っていたので、それに対してモヤモヤしてた人は割といたみたいで、そういう人がけっこう来ていた。

増田：そういった人と、市大の統合問題について主張がある OB が他学部の方も含めてけっこう来てたよね。今回のシンポジウムは統合問題とは直接関係しないけど、大学や文学部が現在置かれてる苦境に対して思うところがある人が、そういった苦境に逆襲する議論を聞いてみたい、といったところもあったんじゃないかな。

≪L 型大学・G 型大学≫

――外部のパネリストの方の意見を聞いて、外部から文学部はどう思われているのかとか、何か分かったことはありますか？

海老根：僕が新鮮だったのは、L（ローカル）型大学／G（グローバル）型大学の議論に対する小林さんのコメントかな。多くの大学教員にとっては、あの分け方自体、非常に不評なんですよ。L 型大学は観光英語だけしとけばいい、みたいな。

増田：シェイクスピアとか読ませるな、実用英語を叩き込め、的な(笑)。

海老根：だけど小林さんが言うには、あの議論は東大の先生側に立って見ちゃうとナンセンスなんだけど、現場の声を拾ってみると、そんなに一様な否定論ではない、と。あともうひとつ印象的だったのは、人文学の研究者が文学部を擁護すると、原理的な擁護論になってしまう。そして、その場合、研究者は無意識のうちに自分を東大の先生のポジションに置いちゃう。しかし、そういうスタンスから文学部にはこんな意義があって、人文学の教室ではこんなすごいことが起こってるんだ、っていう風にやってしまうと、「東大・京大は確かにそうなのかもしれませんけど、そうじゃない文学部もたくさんありますよね。そういうところはもういらないですよね」っていう逆の文学部廃止論になっちゃう。それを指摘されたときにはハッとしましたね。

人文学の研究者がやるとどうしても原理的な擁護論になってしまうけど、それだけでは不十分なんだよね。東大の先生が文学部を擁護するのとは違って、大阪市大のような大学で文学部を擁護する場合には、二段構えにする必要がある。もちろん人文学一般の意義っていうのもあるんだけど、それを個々の大学に落とし込んだときの意義も考えないといけないんだな、と。それは盲点でしたね。

増田：小林さんもオバタさんも教育ジャーナリストですから、大学を主に「教育」の観点から見てるんですよね。広くいろんな大学を俯瞰する観点から見ると、大阪市大はかなりの上位層にある、と彼らは指摘する。大阪市大の人たちは学生も教員も含めて、自分たちがエリートであるという意識はほとんど持ってないけど、日本の高等教育全体から見たら、国公立の大学であるという時点ですでにかなりの上位層に位置するわけです。自分たちがやっている研究や教育は、社会全体の中でどういう位置にあるのか、ということを市大の人が考えるとき、ついわれわれは「上」とだけ比較してしまう。京大はこうだ、阪大はこうだ、といったように。けどその観点はやはり偏ってて、もっといろんな大学はあるんだけど、それが大阪市立大学の社会的立場を考えるときに不可視化されてる、と小林さんやオバタさんは指摘してくれたように思います。オバタさんにしても小林さんにしても、日本全体から俯瞰すると大阪市大は上澄みなんだから、「文学部の社会的意義」といったことをそんなに青筋立てて言わんでもええんちゃう、といったスタンスでしたね。まあ確かにそういうところはある。さっき海老根さんが挙げた L 型 G 型の分類というのも、外部から見ると大阪市大は十分 G 型大学、まあ G 型大学って言っていいのかわからないけど、そう位置づけられるわけですよ。でも市大の中にいると、「上」の大学がやっているような教育研究が維持できるかどうか、ということに過剰に危機感を抱いてしまうんですよね。その危機感のあり方ってのも、文部科学省の人や企業の人からの視点と、中にいる教員や学生からの視点では、だいぶ違っているのかな、と思いました。

――外部から見た視点は重要ですね。

増田：違う観点からいうと、文学部自体が役に立たないと社会から言われていることは事実なんですよね。予算減らされたりとか、文系学部の縮小に誘導されたりとか、そういった圧力もある。たとえ大阪市大文学部が全体の中では比較的上澄みに位置しているとはいえ。その圧力にどう対抗するか、は考えなければならない。海老根さんが言うように、原理的な擁護論はあんまり効果がない、というところもある。全体の構造の中で市大文学部がどういうポジションにいるかを踏まえた上で、じゃあそういう中で必要となる文学部の教育研究は何か、といったことを考えて訴えていく必要があるだろうな、と思うわけです。

――それを受けて具体的に、教員、教える立場として何をどう教えたらいいって思うところは。

増田：学生への教育はね、今までと変わらず淡々と、ビシバシと鍛えていくのがいいかなと（笑）。

≪イノベーション≫

海老根：一方、オバタさんはイノベーションの話をしていたよね。ただ、イノベーションは起こそうと思って起こせるものじゃないし、計画的にイノベーションを起こせるような方法なんてないから、学べないし教えられない。イノベーションというのは、多様性があって、カオス的な場所で起こる。だから、カオスな状況をうまくマネージメントして生産的に活用できる能力が求められている、という話をオバタさんはしていた。ただそこで、僕らがじゃあイノベーションを誘発するような教育メソッドを実践しようとかやりだすと、まったく主旨に反することになっちゃう。だからそれは狙ってはいけないんだけど、研究をするという状況は基本的にカオスなんです。答えのわからないところでいろんな人が好き勝手言って、いろんな出来事が起こって、様々な理論や仮説が提起される。基本的に研究の最前線というのは、いつもカオス的な状態なんです。そこを僕らはナビゲートしている。そういう意味では、オバタさんが要求しているようなことしていると言えばしている。ただそれは、シラバスですべてを可視化して、あらかじめ教えることを全部書くように求めるような動向とは逆かもしれない。その意味で、教育の現場では、そうしたカオス的状況をナビゲートするような実践は難しくなっているかもしれないね。

増田：イノベーションを起こす教育、今までなかったものを考え出す教育を、日本の大学はこれまでどんな仕組みでやってきたか。例えば最近、日本の研究者がノーベル賞を毎年のように受賞しているでしょ。今ノーベル賞を受賞している方々が受けてきた教育は、ずっと昔の大学教育ですよね。往時の大学では何をやっていたか。そういった「かつての」大学教育の理念型は京大モデルだと思うんですが、それは単純化するとこんな感じです。まず優秀な学生をピックアップして京都の街に集団で住まわせる。その中で授業はゆるく適当にやって、自由時間をたくさん与えておく。

一方で書物や実験設備などの研究リソースは豊富に準備しておく。そうすると優秀な学生や研究者たちは暇だから、勝手に変なことやり始めるわけです。「変なこと」というのは、授業で教えた通りのことを学ぶのとは異なるやり方で、ということ。暇があってリソースがある環境で優秀な人間が集まると何か化学変化のようなものが起きる。サークルであるとか、京都周辺のカルチャーの現場とか、そういったものも含めて学生たちに「変なこと」を生じさせる環境がある。きっちりしたシラバスとかカリキュラムとか、オフィシャルなシステムの中で人間は成長したり、面白いことを考えたりするわけじゃなくて、隙間があってリソースがあって、放し飼いされる空間の中で、すごいものがボーンと出てくる。そんなシステムでやってきたわけですよ。京大は一番極端なモデルだけど、大学であれば多かれ少なかれ、ゆるーく隙間があって、表向きの看板と違うことがそこでいろいろと行われる。日本で何か新しい物事を生み出すシステムでうまくいっているところはだいたい皆そういう仕組みなんですよ。別の例で言えばコミケもそうなんだけど、日本の著作権法では表向き禁じられている無断での二次創作も、権利者のお目こぼしがあって、そのグレーゾーンにコミケのような文化的コモンズ（共有地）ができて創造が活性化する、そんな構造になってるんだよね。他方で西洋型のシステムは、そのあたりの隙間をはっきりルール化する傾向がある。日本の場合、表向きの仕組みや明示的なカリキュラムや法律などと実態との間に乖離があって、その乖離が創造性を生む源になってきた。大学もそうなんです。ただそれが最近は、グローバル化というか、西洋的なシステムを表層的に取り入れられる趨勢が強いように感じる。現在の日本の場合だと、実態を優先させてルールを変えるのではなくて、「表向きのルールに実態を合わせろ」という方向に行くわけですね。90 年代以降の大学改革もそういう方向性になってて、大学においてもルールに実態を合わせて乖離をなくすような圧力がかかる傾向がある。一学期に授業を 15 回きっちりやりなさい、っていうのもそうだよね。ルールとしては授業 15 回っていうのはあるんだけど、かつての大学では一学期にだいたい 10 回も授業やったらもう十分だったわけですよ。10 回やっておしまい、にしないと、暇な時間から生まれる創造性は維持できない。でも偉い人はルールの方を優先させろって言うわけです。そうやって今までのイノベーションを生み出してきた余地がどんどん縮小されてるのが実態だと思うんですね。授業時間の例が一番わかりやすいんだけど、文学部の学問の一番重要なリソースってのはとにかく時間ですよね。本読む時間が必要なわけだよね。

――確かに。

増田：授業の時間を増やせば、教員も大変だし学生も大変だし、どんどん勉強する時間減るし、イノベーションを生み出すことに関しては全く逆効果になってるんだけど、それ言っても偉い人はやり方変えてくれないんだよね。「文学部が今ピンチになっている」と言うときに、研究費が減ってるとか研究者のポストが減ってるとかいったこともあるけど、むしろ「ほっといてもらえる時間的環境」が失われていることが大きい。授業時間だけではなくて、さまざまな手続きや申請書類が膨大に増えて事務作業時間が増大している。そうして京大モデル的なイノベーションを生む日本にかつてのシステム、今までやってきたような教育のあり方やクリエイティビティが育つ環境がどんどん潰れていってる、と感じるんですよね。

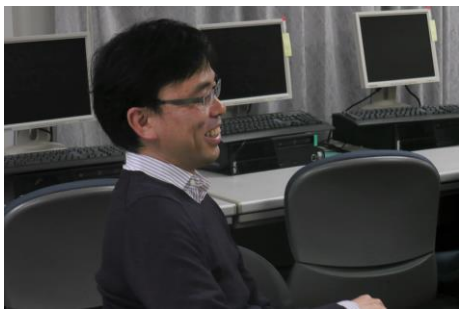
時間だけじゃなくお金についても、学生の立場では重要な問題で、あとで詳しく言うけど学費がどんどん上がっているということも問題としてある。学生もバイトしないと生活できないからますます自由な時間は減っている。こないだ新聞の投書欄で、団塊の世代のおじいちゃんによる「最近の学生はけしからん、我々の時はバイトで学費稼いでたぞ」という主張が載ってネットで炎上していたけど、昔と今とでは学生の経済的な状況が全く違うことがほんとうに世間に知られていない。君たちがおじいちゃんおばあちゃんになったときに、「我々の若い頃は」などと言わないように、多面的に物事を眺められるように教育するのが、我々の使命だと思うんですよね。

≪「文学部は役に立たない」のか？≫

――当日のシンポジウムは、学部を出て院とか、院から出て社会で働くとか、出口の議論が多かったかなって印象で。今、どうして文学部が役に立たないと言われてるんでしょうか。

増田：今回の文系学部廃止問題は、文科省が、役に立たない学部や学科を潰して、税金を効率的に使う組織編成をしてますよ、とアピールしたかったんだけど、そのアピール

の仕方が下手だったから、騒ぎになっちゃったところがあります。そのあたりの経緯については吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社新書、2016 年）に詳しいです。でも実際、例えば今年の大学受験動向とか見てると、教員養成系の大学とか、かなり変化してるんですよね。いわゆるゼロ免課程、地方国立大で教育学部の中に置かれて、教員免許取得を必須としない課程、言い換えれば地方大学で文学部的な役割を果たしていたところが軒並み改組されているんですよ。大学の学部構成も、ここ２～３年で大きく変わってて、その変化は特に地方で顕著です。地方の大学には本当にプレッシャーが強くて、文科省がちょっとなにか言ったらその通りにせざるをえないところがある。そういう状況に対して、人文系の研究者とか教育者――まあ我々ですよね――が何らかの形で「それはおかしい」と主張しておくべきだ、というところはありますね。



海老根：役に立たないって言うときに、吉見俊哉さんは「役に立つ」は二種類あって、ひとつは価値創造型で、もうひとつは目的遂行型だと言ってるよね。目的遂行型は「これするとこれができます」というやつですね。価値創造型は、「価値の基準を変える」、「新しい価値の基準を探す」ってことで、吉見さんは目的遂行型の「役に立つ」ばかりが言われていて、価値創造型が軽視されてると言う。シンポジウムでの僕のプレゼンでは、それをちょっと別の角度から見てみたいと思いました。それで大学というものはそもそも社会とずれるものなんじゃないか、という話をしたんです。大学の知、特に人文学は、一方では過去の方向を向いている。図書館に象徴される過去の知の継承という営みです。しかし、もう一方では、実験室に象徴されるような、新しいもの、未来を志向する面も大学にはある。たぶん大学というのはその両極を志向していて、現在がないんですね。だから社会と歩調が合わない。「役に立つ」ということが、大学でなされていることがそのままシームレスに現場に接続する、つまり社会とシンクロするということを意味するとしたら、大学は、本来、そういうことができない組織なんじゃないか。人文学の営みは、同時代に背を向けて、ギリシャ哲学とか古代宗教とか江戸時代とかに没入し、そこから現在に戻って来る。深く過去に沈静して、そこから現在をとらえ直して、未来に向かう。社会の側から見ると、大学の営みのそうした部分がわかりにくいんだと思います。

増田：でもさあ、高等教育に対する社会からの見方は時代によっていろいろ変動してると思うんですよね。例えばざっくりしたイメージなんだけど、戦時中は現在のように「文系学問は役に立たない」と言われている状況と近いところがある。文系の学生から学徒動員されたでしょ。理系の学生は兵器作るのに役に立つから、戦時中でも大学に残って研究できたわけです。でもドイツ文学とかは戦争の役に立たないよね（笑）。戦後はその反動というか、反省が生じる。戦後すぐの時期には大学が社会と完全に歩調を合わせてしまうことに対する危機感が強くあったんですよね。産学協同がタブー視されたりしたのもそうです。大学は、社会とずれた存在であるべきで、社会が過ちを犯しそうなときに社会と異なる批判的な見方を投げかけるべきで、そうでないとあの戦争のときにように社会がむちゃくちゃになってしまう、といった意識は戦後の日本にはかなり濃厚にあったんだけど、それがだんだん変容してくる。特に学生運動が激化した時期、60 年代以降ですよね。学生運動が激しい時期はちょうど日本の高等教育の大衆化の時期にあたっているわけです。60 年代の学生紛争は、大学生がエリートだった時代が終わりつつあった時期の混乱、「エリートじゃない大学生」のアイデンティティ・クライシスという側面もあった。それから半世紀経った今の大学生は、自分が大学生だからといって自分のことを「エリート」とはまったく思わないでしょう。大学生からエリート意識がなくなることは、自己利益のために学問や学歴を用いる志向を強めます。大学が社会とずれていることを許された時代の大学生は「エリート」である一方、ノブレス・オブリージュを課されている身でもあった。自分が学んだことを自己利益のために用いるのではなく、社会に対して何らかの形で還元しなきゃいけない、社会に貢献するために高等教育を身につけた、という意識が自明だったわけです。人文学の教育研究でももちろん同じで、ギリシャ語や古代仏典など、現代社会には一見して役立ちそうにない知見を高度な水準で維持すること自体が重要なのだ、という確信があり、大学外の社会の人々もそれを一応は共有していた。エリートと大衆の安定的な関係があったわけです。それが学生運動以降、大学生からエリート意識が失われると「良い企業に就職するために大学に行く」といったような、教育や学歴を自己利益に奉仕するためのものとみなす意識が一般化してくる。あともう一つその後の大学にとって重要なことは、学生運動の激化のあと、学費がぐんぐん上が

っていくんですよ。60 年代中頃は国公立大学の授業料が年間 12000 円です。現在の所得水準で換算すると年間 6 ～ 7 万円くらいの感覚。だから自分でバイトして学費稼いで大学に行くことができた。お金がなくても勉強さえできれば大学教育を受けることができる経済的環境があったわけだけど、70 年代以降急速に大学教育は高い買い物になっていく。国立大の年間授業料は 72 年に 36000 円、76 年に 96000 円、78 年に 144000 円と上昇して、僕と海老根さんが大学に入学した 1990 年は 339600 円、今年（2016 年度）は 535800 円です。今、大学にいる人々は、学生だけでなく教員も含めて、大学教育が私的なサービス財になって以降の大学教育を受けてきてるわけだよね。そうなるとエリート意識とノブレス・オブリージュではなく、高い学費払って勉強したんだから自分のために使うよね、という志向が強くなる。「役に立つ学問を学びたい」という意識は、自分が受けた大学教育にかかった高額なコストを取り戻したい、高額な授業料の元を取りたい、という発想と通底している。そうなると文学部的な「役に立たない学問」の存在意義が理解されなくなるわけです。高い金出して大学で学んだのにお金稼ぐのに役に立たない文学部の学問。高等教育が社会とは隔絶した知的なものを維持することへの社会的合意がなくなって、文学部の教員や学生が趣味人の集まりのように思われてしまう今、さあどうする、ということになる。そういう状況の元で「文学部は必要だ」と訴えるなら、文学部や人文学の存在意義を根本から考えておく必要があるわけです。

文学部ってのはいろんな分野があるけど、本質的な役割というのは「古典的な知を保存する」というところにある。歴史学、古典文学、哲学などが典型的ですけど、昔からの人類の知の歴史を、革新するというよりは保守するのが重要な役目です。本っていうものは、そこに存在していても、読み方がわからなくなれば読めなくなってしまう。膨大な歴史資料が残っていても、例えばラテン語やくずし字が読める後続世代を養成することがなければ、その知的遺産は死んでしまう。文学部の本質は、人類の知的資産を保存しメンテナンスできる若い人々を養成する場所だと思うんですよね。海老根さんが言う「今現在とのずれ」とも通じるわけだけど、現在の普通の人々がアクセスできない知的遺産を理解し解釈できる人を再生産していく重要性への社会的合意が今あやふやになっている。それが文学部の危機の一つの現れだと僕は思っている。大学教員はその重要性に関しては自分の専門分野にかかわらず共通して同意していると思います。僕が研究しているような新しい分野であっても、中長期的にそれが人類の知的遺産に組み入れられるか、それとも忘れ去られるかのメカニズムについて考えたり、それが古典になった場合どういう形で保守されうるかを考えるのが仕事、といった自己認識がある。いずれにせよ、古いものを読めるかたちで伝えていくのが文学部の研究・教育の大きな役割だと思うんですよね。そういうことは「社会的ニーズ」があろうがなかろうが絶対必要なことだと思っている。吉見さんの大学論、文系学部の存在意義の主張には個人的にちょっと引っかかるところがあって、吉見さんは「文系学部は新しい価値を創造するから長期的に役に立つ」といった言い方をするんですよね、でも、知を新しく作り出すことの重要性よりも、それを保守する重要性をもっと主張すべきではないかなと思うんです。こんにちの社会では「何か新しいものを生み出す」ことの価値ばかりが称揚されるんだけど、かつての知を保存し次世代に伝える人を幅広く育成することはそれ以上に重要だ、ともっと言わなければならない。それは文学部の本質的な役割に関わる主張だと思うのです。

海老根：ただそれだと、古典的な知のエキスパートは何人かいればよくって、いくつかの大学が養成すればそれで十分でしょうと言われちゃう可能性もあるのかな。そうなってくると、大阪市大の文学部にもいろんな学問分野があるので一緒くたにはできないんだけど、これはいらないよねっていう部分も出てくる可能性がある。もちろん市大文学部でこの研究がされなくなると本当に困るという分野もあるわけだけど。

増田：ニーズがあるかないかだけで判断されるわけですよね。僕はそれは間違ってると思うんですよね。何が重要で何が重要でないかを現在の価値だけで測ってはいけない。学生の授業評価アンケートとか、現在のニーズ調査がすべて、それだけに従うのが正しい、とは僕は思わない。かといって現在のニーズを一切無視というのも違うと思う。そのあたり「ほどほどのいい塩梅」というのがかつては安定した形であったように感じるんですが、現在はそれがなくなって社会的ニーズ一辺倒になりがちなのが難しいところじゃないかと思うんです。文科省の大学に関する施策が、教育や研究をニーズで測ったり、成果で測ったり、アウトプットとかエビデンスとかで評価する方向になってしまってる。それに関しては、んーどうしたらいいのかねえ（笑）。ただ海老根さんの指摘する「程度の問題」とでもいうべき文系縮小論は確かに手強いものとしてありますよね。インド哲学は重要だけど、全国の大学で養成するほどの必要はないんじゃないか、もう少し縮小してもいいんじゃないか、といった意見がある。そういう意見にしたって、インド哲学とか、素粒子実験施設ほどにはお金かからないんだからもっとあってもいいんじゃない？と思うんですよね。ダメかな（笑）。個別の分野について、具体的にどれ

くらいの費用対効果でやってるかは分野ごとに多様性があって、ひとくくりにはできないですけど、文学部の教員としては、役に立たないように見える教育研究でも縮小するとすぐ水準が落ちて後続世代が読めなくなっちゃうよ、人類の知的遺産が消えてしまうよ、って地道に言っていくしかないんじゃないかな。

海老根：ちなみに費用対効果については、ドイツでは社会学者が実証的な調査をしていて、批判的な検討がなされている。投入されたお金に対して論文を何本産出しているかというコストパフォーマンスを調べてみると、文系は理系に比べて費用対効果のいい学問なのがわかる。ただ、この論拠はたぶん文系の擁護には使えない。「文系はお金がかからないんだから残したらいいじゃん」って言うと、むしろ「お金がかかってないというのは、あんまり価値がないってことですよね」という話になる。逆に iPS 細胞のような理系の研究については、「あれだけお金をかけてやっているということは、価値があるということですよね」と。だから費用対効果は論拠にならなくて、お金の論理、コストパフォーマンスによる文系の学問の擁護はたぶん通用しない。もっと深い論拠、さっき増田さんが言ったような論拠が必要ですね。

増田：文学部に批判的な立場、今の文系学部は要らないと主張している人たちと同じ土俵、すなわち「お金がかからない学問は価値がない」というルールの土俵で文句を言ってもうまく対抗できないところがある。そうではなく「その土俵自体がおかしい」ってことを、その「土俵」を取り巻く外側の人々に対して説得する作業をやっていかなければならないと思います。文系学問を擁護する主張にはいろいろなものがありますが、僕が好きではないタイプのものとして「お金の問題じゃないんです、学問や文化は伝統的に無条件の価値があり重要なものだったのです」という類のものがある。ある対象の存在価値の自明性を疑わない主張は説得力が無いし、そもそも対象の存在価値の自明性をいったん解体し、ラディカルに（根本的に）考えなおす思考の訓練をするのが人文学の空間だと思う。その思考は人文学の存在価値自体にも向けられるべきです。

そもそもわれわれの周囲にある「伝統的な存在」って、実は不断に革新を続けてきた結果として存続しているわけですよね。例えば東大寺や四天王寺などの古い大きなお寺などを考えてみればいい。平安時代と今とでお寺の組織内部のシステムがまったく同じであるはずがない。お寺もまた社会の支配的価値とずれた独自の価値を保っている組織なのですが、「外の社会とは違う独自の価値を維持する」という存在目的を保つために必要な変革を続けてきた結果、これらの古いお寺は何百年も存続してきたわけです。

だから「人文学が危機でなかった時代」というのはない、と考えた方がいい。人文学と大学について海老根さんが論じた論文（「エクセレンスの大学、人文学、都市」、『都市文化研究』17 号、2015 年。ネットで検索すれば全文読めます）はとても面白いのですが、その中で人文学の一つの可能性として「リスクをはらんだ思考」というドイツの学者の考えを紹介している。社会の支配的価値の中では無用どころか危険とみなされるような、リスクを伴う思考をも可能にする場として人文学はある、という主張です。となると、当然そのような思考と社会の関係は緊張したものになるだろうし、人文学の存在意義に懐疑的な社会の視線がまったくなくなってしまうことはありえないということになる。「人文学は意味がない」とか「無用だ」と言われなかった時代はないしこれからも来ない、と考えるなら、そういった社会とのズレから生じる人文学の存在意義への批判にどう対するかは、その時代その時代でさまざまなやり方があって、その都度対処するほかない、と覚悟を決めるしかない。同時代の社会との緊張関係と、それへの対処を繰り返して知の歴史というものが形作られてきたし、これからもそうなのだろうと思っています。ただ人間、自分が生きてる時代が特別だと考えたがるからね。「現在の文学部や人文学の危機というものは、今までになかった未曾有の危機だ」ってつい言ってしまいがちなんですけど、ほんとはそんなことはないと思うんですよね（何十年か前よりは危機だよね、といった比較はできますが）。今の自分たちが生きている時代の特殊性と一般性を俯瞰する視野を得るためにあるのが文学部の教育で、その本質は歴史教育だと捉えています。自分の時代と隔絶した時代を知ることで、今の時代を相対化するということが、人文学的なセンスの中核にあると思うのです。